メトロポリタン史学会会報

第 11 号（2011.9.29）

発　行　メトロポリタン史学会

メトロポリタン史学会
第七回総会・大会のお知らせ

すでにお知らせしたとおり，4 月 23 日開催予定の第 7 回総会・大会は，震災・原発事故の影響で中止を余儀なくされました．そのため今年度は総会の議を経ることなく活動を開始することになりました．現在は委員会で確認した暫定方針・予算に基づいて活動しておりますが，こうした変則的な事態を解消するため，下記の要領で改めて総会・大会を開催することにいたしました．会員の皆さんの参加をお待ちしております．

総会では昨年度と今年度半年間の活動を振り返り，今後の会活動の方針を確認したいと思います（昨年度の会計決算と今年度の暫定方針・予算，委員会体制については，後掲の資料をご参照願います）．

また大会では，「帝国とその遺産」をテーマにシンポジウムを行います．4 月に予定していたシンポジウムですが，ミシガン大学教授・スーニー氏の来日が困難なため，報告者を一部入れ替えての実施となりました．ご了承下さい．

日　時　　２０１１年１１月２６日（土）午前１０時３０分～午後６時
会　場　　首都大学東京 本部棟１階・大会議室
　　（京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約１０分）
日　程　　①総会：午前１０時３０分～１２時
　　②大会：午後１時～６時　シンポジウム「帝国とその遺産」
　　〔報告者〕
　　塩谷哲史氏（筑波大学准研究員）
　　「アムダリヤの水を誰が管理するのか
　　――帝政末期ロシア＝ヒヴァ・ハン国間の灌漑利権論争――」
　　麻田雅文氏（日本学術振興会特別研究員 PD・首都大学東京）
　　「帝国から国民の河へ――松花江をめぐる日中露の闘争，1895～1950――」
　　岡田友和氏（日本学術振興会特別研究員 PD・大阪大学）
　　「仏領インドシナにおける都市と労働――ハノイを事例に――」
　　全体討論：午後４時～５時４５分
　　③懇親会：午後６時～８時３０分（会費４，０００円）

〔シンポジウムの趣旨〕

「帝国→諸民族の覚醒→帝国崩壊・自由とバラ色の世界」という従来の単線的な史観は崩壊して久しい．帝国崩壊後の新たな国際関係単位として想定された国民国家システムもまた，近年，その限界を指摘されて

いる．

一方，ソ連崩壊後，一元的ないし（それ自体矛盾する見方だが）多元的世界秩序を指して「帝国」という用語が言論界で広くもてはやされたのは周知の通りである．また，山本有造編『帝国の研究』や山下範久『帝国論』といった歴史概念としての「帝国」を再検討する真摯な試みも現れている．本シンポジウムは，100 年前の現実に戻って，帝国と植民地間関係を問い直そうとする一つの試みである．

そもそも「帝国」はその定義自体が多様である．『帝国論』の編者山下は「新しい「近世帝国」への凝集へと向かっている」(p. 230) とし，新たな帝国時代の到来を予見する．すなわち，それまで人類史で普遍的に見られた帝国の一種としての「近世帝国」は 19 世紀半ばで終了し，それ以降は「帝国不在」の人類史では例外的な時代が続き，あくまで政策として「帝国主義」を採る国民国家の時代が続いたとする．一方，同じ時期について，山室信一の帝国を自壊させる「国民帝国」という見方も存在する．

本シンポジウムでは，こうした類型論から少し離れ，「実践」と「蓄積」の問題から 20 世紀初頭の「帝国」とその「遺産」を検討したい．具体的には人の多重アイデンティティと社会の多層性に注目し，これに時間軸としての帝国の膨張と崩壊，空間としての多法域国家としての帝国の問題をリンクさせることで，包み込み主体としての帝国あるいは統治モード/実践としての帝国の姿を，「統治される側」からの視点を絡めて浮き彫りにすることを目指す．こうした検討の中で，フラットの一つの単位としての民族にも注目をする．

すなわち近年の研究動向にもある「帝国」をよりネイティブに照らして考えること，その影響を当時の文脈に加えて（知的営為としてのわれわれの現在の研究視角の源の関連するような）よりアクチュアルかつ広範な問題意識に接続することを大きな目標として想定している．より具体的には帝国の諸政策遂行にあたって中央と辺境や協同・展開の側面などから見るだけではなく，濃淡やアクセントを見極めることで帝国とその中で浮かび上がる現地社会のダイナミズムを浮きぼりにすることが課題となろう．フランスのベトナム統治における現地官吏の存在した空間的位相，中央アジアでの大規模灌漑計画における様々なステークホルダーの動き，松花江をめぐる日中露の闘争についての報告を予定している．ちなみに近年のロシア・アジア部研究では，フランスの植民地政策をロシア帝国エリートが参照していた点について多くの指摘がなされている．こうしたある種の空間的広がりを担保した上で厚みのある議論を期待したい．

メトロポリタン史学会第六回秋季シンポジウム報告

昨年の 11 月 20 日（土）に，首都大学東京（東京都立大学）大会議室において，「古代東アジアの国家形成」をテーマにメトロポリタン史学会の第六回秋季シンポジウムが開催されました．参加者は 23 名でした．内容は以下の通りです．なお報告は会誌『メトロポリタン史学』第 8 号（2012 年 12 月刊）に特集論文として掲載される予定です，ご期待下さい．

川口　勝康氏（首都大学東京）　「国家形成の指標と日本古代史における画期」
澤田　秀実氏（くらしき作陽大学）　「古代国家形成期における前方後円墳秩序の役割」
早乙女雅博氏（東京大学）　「考古学から見た新羅の国家形成」
小嶋　茂稔氏（東京学芸大学）　「中国古代国家形成史研究の成果と課題」

メトロポリタン史学会第７回総会議案書（案）

２０１１．４．２３（委員会確認）

［メトロポリタン史学会　２０１０年度活動報告］

2010.4～2011.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 6 号を 2010 年 12 月に刊行し，史学科のある大学を中心に約 80 機関に寄贈した.

2．第 6 回総会・大会を 2010 年 4 月 17 日（土）に開催し（参加者 52 名），第 7 回総会・大会（2011 年 4 月 23 日）の準備を行った.

3．第 6 回秋季シンポジウム「古代東アジアの国家形成」を，2010 年 11 月 20 日（土）に実施した．参加者 23 名.

4．会報 10 号（2010.11.16）を発行した.

5．会員数は現状維持にとどまり，拡大目標（165 名）を達成できなかった.

［メトロポリタン史学会　２０１１年度活動方針案］

2011.4～2012.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 7 号を 2011 年 12 月に刊行する.

2．第 7 回総会・大会を 2011 年 11 月 26 日（土）に行う.

3．第 5 回秋季シンポジウム『ダーウィン・進化論と歴史学』，第 6 回秋季シンポジウム「古代東アジアの国家形成」の各報告を，会誌『メトロポリタン史学』7・8 号に特集として順次掲載する.

4．第 6 回大会シンポジウム「20 世紀の戦争――その世界史的位相――」の報告集を有志舎より刊行する.

5．第 5 回歴史探訪を実施する.

6．第 8 回総会・大会（2012 年 4 月 21 日）の準備を行う.

7．165 名を目標に会員拡大に努め，会財政の確立を図る.

8．必要に応じて委員の補充を行う.

［メトロポリタン史学会　２０１１年度委員名簿］

任期：2011.4～2013.3

会　　長：佐々木隆爾
副　会　長：峰岸純夫，増谷英樹，小谷汪之
事　務　局：木村　誠（事務局長），谷口央，赤羽目匡由，白川耕一，前田弘毅
編　　集：河原温（責任者），奥村哲，佐々木真，澤田秀実，月脚達彦，福田千鶴，出穂雅実
企画・研究：中野隆生（責任者），小野昭，角田三佳，川合康，趙景達，橋谷弘，林田伸一
監　　事：義江明子，山田昌久

メトロポリタン史学会　２０１０年度決算報告

2010.4～2011.3

[収入]

			2010予算	2010決算
前年度繰越金			524,764	524,764
会費			739,000	749,000
	2005年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	8,000
	2006年度	(現金)	—	5,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	13,000
	2007年度	(現金)	—	10,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	20,000
	2008年度	(現金)	—	10,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	31,000
	2009年度	(現金)	—	30,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	68,000
	2010年度	(現金)	—	108,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	338,000
	2011～20年度	(現金)	—	55,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	53,000
雑収入			220,000	84,215
	会誌売り上げ		—	16,000
	叢書売り上げ		220,000	68,200
	銀行口座利息		—	15
借入金			—	300,000
計			1,483,764	1,657,979

[支出]

			2010予算	2010決算
会誌制作費			500,000	897,750
叢書購入費			550,000	550,000
郵便料金			140,400	96,885
	会誌発送		39,600	33,075
	大会案内・会報等発送		50,000	16,650
	叢書郵送		40,800	42,160
	葉書・切手		10,000	5,000
	その他		—	0
事務用品代			—	20,158
賃金・旅費			50,000	19,000
雑費			20,000	48,231
	振込手数料		—	945
	弁当・お茶・紙コップ		—	8,189
	懇親会赤字補填		—	23,347
	音声データ反訳料		—	15,750
予備費			203,364	0
次年度繰越金			—	25,955
	現金		—	7,641
	銀行		—	8,964
	郵便振替		—	9,350
計			1,483,764	1,657,979

●会員数 154名（一般144名　学生・院生10 名）

●会費納入率　10年度・92/154＝59.7％　09年度・123/154＝79.8％　08年度・126/149=84.6% 07年度・131/148＝88.5%

メトロポリタン史学会　２０１１年度予算

2011.4.1～2012.3.31

[収入]　786,955

前年度繰越金					25,955
会費					739,000
	一般会員	5,000	×	120	600,000
	学生・院生	3,000	×	12	36,000
	未収分	5,000	×	20	103,000
		3,000	×	1	
叢書販売		2,200	×	10	22,000
合計					786,955

＊予定会員数： 165名（一般 150，学生・院生 15）

[支出]　786,955

会誌制作費					500,000
通信料金					99,600
	会誌郵送	180	×	220	39,600
	大会案内・会報等発送				50,000
	葉書・切手				10,000
事務用品代					20,000
賃金・旅費					50,000
雑費					20,000
予備費					97,355
計					786,955

【歴史随想】

モンゴル・サルヒット野外調査記（その 3）

出穂雅実（首都大学東京，ユーラシア上部旧石器時代）

古い形質を持つ人類化石が発見されたサルヒット砂金鉱山（第 1 図）の採掘は，私の想像以上に大規模なものだった．美しい山間の緩やかな谷は大きく深く掘削され，痛々しかった．下流側に目を転じると，砂金が選鉱されたあとの土砂残滓が巨大な成層火山のような「ズリ山」をつくり，異様だった．そして草原は縦横無尽に走りまわる運搬車によって広く傷つけられていた（写真 1 上）．

さらに，普段は風にそよぐ草の音しか聞こえないはずの大地に，砂礫を掘削するバック・ホー，掘削した砂礫を運搬するダンプ・トラック，そして選鉱のために用いるベルト・コンベヤーの音がガンガンと騒々しく響き渡っていた．草原の国モンゴルでは，このような騒々しさが文字通り不自然である．

この鉱山に住んでいる労働者数は数十人程度で，貨物用コンテナを改造した住宅に家族とともに暮らしていた（写真 1 下）．また数 km 離れた地点には「ニンジャ」と呼ばれる砂金の盗掘集団が野営していた．離れた地点から双眼鏡で様子をうかがうと，10 軒以上のゲル（ユルト）が寄り集まり，あたかも集落のようであった．「ニンジャ」はモンゴル民主化後に急増したマンホール・チルドレンや，手っ取り早く現金収入を得るために盗掘に手を染めた牧民からなるという．「金をもらったって，すべてはアルヒ（ヴォトカ）に消えるん

だ」と，運転手は悲しそうに言った．

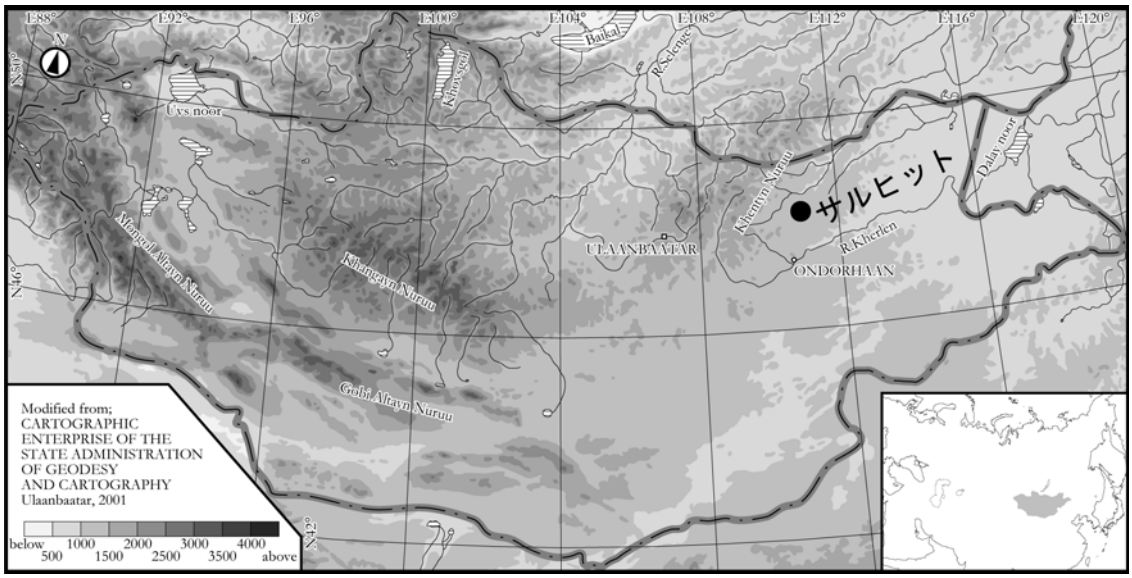
鉱山は頻繁な盗掘に備え，マシンガンで武装した数人の警官が県都オンドルハーンから派遣され，常駐していた．私たちは警官と鉱山長に目的を伝え，入山した．モンゴル科学アカデミー考古学研究所（IAMAS）のアムガラントゴス研究員が GPS を片手に砂金採掘地点の中に入り，私はその後を追った．運転手は荷物の見張りのために車で待機することにした．

歩き始めてほどなく，アムガラントゴス研究員が，「ここが化石発見地点です」と教えてくれた（写真 2）．ここまでの行程は緊張の連続であったが，あの非常に古い特徴を持つ頭蓋化石は，まさにここから発見されたのかと，私は感慨深かった．

化石発見地点は，採掘が完了した砂金採掘坑の中にあった．発見地点の両脇には高さ 3m 程度の採掘後の生々しい露頭ができていた．発見地点には，IAMAS の最初の試掘坑が埋め戻されずに残っていた．IAMAS の紀要に掲載された速報（Tseveendorj et al., 2007）の写真に写っていたのはまさにここであった．

まずはぬかるんだ試掘坑に入り，試掘坑壁面を削って地層を確認した．未固結の第四紀砂礫層はほとんど残存せず，深さ 10cm 足らずですでに基盤の砂岩層（三畳紀）が露出していた．化石が出土するとすれば第四紀未固結砂礫層のはずで，基盤の砂岩層から出土することはあり得ない．

写真 1　砂金鉱山の集落（上）と鉱山労働者の子供（下）． 埃が舞い上がる殺伐とした風景の中で，たくましく暮らしている．



第 1 図　モンゴル・サルヒット人類化石発見地点の位置． ロシア・ザバイカル地方の国境までわずか百数十キロメートルの地点にある．周辺の景観は広大なステップである．

砂金の採掘も，第四紀の砂礫層を狙ったものであり，当然のことながらすでにすべて掘り尽くしていたことを確認した．つまり，この地点そのものを発掘調査することは，ほとんど絶望的であることが判明した．しかし一方で，写真 2 にあるとおり，発見地点の周囲には，谷の両側に鉱山の掘削が及んでいない第四紀の未固結堆積物が残存していた．残存していた最大の理由は，比重の大きい砂金が河床にたまる傾向が強く，一方で谷の両側の斜面部分は砂金の包含量が低いと予想され，掘削の対象とならなかったためである．さらなる化石の発見が期待できるか，そして本格的な発掘調査することが可能かどうかは谷の両脇の露頭にかかっていた．

写真 2　サルヒット頭蓋化石発見地点．
手前の窪みは IAMAS による試掘坑．谷筋（写真奥）には掘削を逃れた自然露頭が残存している．

さて，短時間のうちに高揚したり落胆したりを激しく繰り返した気分を落ち着かせるために大きく深呼吸して，ここに来た理由と，いましなければならないことを頭の中であらためて整理した．コパンス教授から私に課された課題は，化石包含層の記載と周辺に遺跡がないかの確認である．当初の予定では昨日の夕方にサルヒットに到着し，その日のうちに調査を開始して一泊し，翌日（今日）の午後にウランバートルに向けて出発する，調査に半日＋半日の丸一日を充てることを計画していた．けれども，到着が遅れてしまいすでに半日を失っているため，残りの半日で大急ぎで調査をしなければならなかった．海外調査にはどうしても動かしようのない日程的な制約があるため，このような変更がしばしば生じる．このような事態でも柔軟に調査を行い，結果を出さなければならない．

だいぶ冷静さを取り戻し，周囲を地形学的観点から俯瞰する余裕が出てきた．まずとにかく，この化石発見地点がどのような地形に位置するのか，2 時間ほどかけて化石が発見されたドライ・クリーク（水量が少ないため通常は流れのない小河谷）の谷筋と，この谷を取り巻く左右岸の丘陵稜線を歩いた．時間がないために車で地形調査することも考えたが，車に乗りながらの調査よりも，歩くスピードでものを考える方が私には合っているので，歩きながら調査疑問を立て，それを説明する仮説を考え，仮説が成り立つかどうか，大草原の中をブツブツ独言を吐きながら考え歩いた．化石発見地点を取り巻く丘陵は周辺で最も標高が高く，そして常時流水があるような安定した河川からは遙かに遠く離れており，安定した河岸段丘は形成されていなかった．周辺の地形は丘陵斜面，河谷に沿う緩斜面，および狭い氾濫原で形成されていることがわかった．段丘が発達する地域と比べると年代決定が難しいことが見て取れた．この調査中，地表面に石器などの遺物が散布していないかについても気を配ったが，発見できなかった．

発見地点の地形学的な状況が確認できたので，次に谷の両側の露頭の地質調査を始めた．まず左岸の露頭を上流側から下流側に向かって観察し，今度は反対に右岸を下流側から上流側に向かって観察することにした．左岸のほうが，丘陵地形の分布が単純で理解しやすいと考えたためである．地形観察による予想どおり，流域の第四紀未固結堆積物は，丘陵から風，雨，および重力で供給される，大小の礫が混じる斜面堆積物および緩斜面堆積物の泥であった．高さ 3m 程度の保存状態の良好な露頭でも，層相変化が少なく，地層の区分は非常に難しかった．

右岸側に戻って谷の半ばまで差し掛かると，砂金掘削によってつくられた荒々しい露頭の一角に，きれいに掘削・清掃された幅 10m ほどの露頭が突然現れた（写真 3）．その形態から，ロシア隊が数ヶ月前に調査したトレンチであることが一目で見て取れた（後にロシア隊の友人，エフゲニー・ルイービン博士にこの写

真を送り，ロシア隊のトレンチであることを確かめた）．ロシア隊がトレンチ設定場所に選んだだけあり，層序を非常に良く観察できる．私は残りの時間をこの露頭の記載に充てることに決めた．

ここからは少し専門的な話になってしまうが，約 4m の厚さを持つこの露頭は，上方から下方に向けて，4 つの地質ユニットに区分できることがわかった．まず最上部は，厚さ 30cm 程度の褐色栗色土である．半乾燥地域の草原に発達する特徴的な土壌である．その下位は，厚さ 50cm 程度のシルト層である．基本的な堆積要因は，偏西風によってもたらされる風成塵（レス）と，雨と重力によって斜面上方から供給される砂礫が混じる洪積土と想定された．その下位は，層厚 2m 程度の緩斜面堆積物である．河川営力でつくられる地層とは異なり淘汰が不良で，シルトや粘土などの粒径の細かい物質と，砂や礫などの粒径の大きな物質が混在していた．最後は基盤の花崗岩層である．時間の許す限りこの露頭にへばりつき，なめるように観察をおこなったが，この露頭の記載から，年代決定の鍵となるような情報はまったく得ることができなかった．

写真 3　ロシア隊調査トレンチ．

鉱山の採掘でつくられた崖に沿って，長さ 10m×幅 1.5m 高さ 4m のトレンチが設定されていた．

一方で，私は数年間，モンゴル東部，北部，およびロシアトランスバイカル地域の上部旧石器時代の遺跡を自分の目で確かめ，堆積物を採取し，日本で分析をおこなうという幸運に恵まれていたため，それらの証拠との対比から，この堆積物のおおよその年代を想定することができた．最上層の褐色栗色土は，完新世（1 万年前～現在）である．その下位の風成塵と洪積土の混合層は，最終氷期極相期（2 万年前），そして層厚 2m を測る緩斜面堆積物は，およそ 7～3 万年前と想定した．もちろん直感は直感であって，これをそのまま論文にすることはできないが，おおよそ妥当であろうと考えた．この直感は，すでに現地に着いたときから頭の中に出来ていたものだが，露頭の記載を終えた時点でますます強くなっていた．堆積物の色調，しまり，混入物の特徴など断片的ではあるが確実な証拠を積み重ねて当時の堆積環境を推測し，氷河期の数千年オーダーの気候変動カーブに対比した．

同時に，人類化石がどの層準から産出したのかについても考えた．実は出発前に，IAMAS のバトムンフ・ツォグトバータル副所長のご厚意によって，化石を実見する機会に恵まれた．この化石標本は，長い年月で化石化しており，手に持つとズシリと重たかった（写真 4）．化石の表面は保存が良く新鮮で，色調は灰褐色を呈していた．ツォグトバータル副所長によれば，化石のクリーニングはまだ実施していないということなので，この状態が産出した状態に近いということになる．また若干ではあるが，化石の隙間には褐色の堆積物が詰まっていた．これらの化石の情報と発見地点の露頭の堆積物を色々と比較すると，その産出層準は緩斜面堆積物の可能性が最も高いという結論に達した．さらに，化石の色調は，緩斜面堆積物下半の色調と非常に

写真 4　人類化石の表面状態．

標本は化石化して重いが，保存状態が良く表面は灰褐色で新鮮であった．

良く似ていることもわかった．これは，堆積物下半のほうが，上半よりも水が多い環境で堆積したことと関連があると考えた．そしてもし緩斜面堆積物上位の風成塵の層準であれば，堆積物中の炭酸カルシウムが非常に豊富な層なので，化石にベッタリと付着するはずである．この検討で，化石産出層準について確信を得た．

気がつくと，すでに午前 11 時を廻っていた．周辺の遺跡を発見することはできなかったが，本格的な発掘調査をするための事前調査としては，発見地点の地形，地質，そして化石産出層準についてそれぞれ一定の見通しを得ることができたと判断した．鉱山長と警官にお礼を述べ，帰路についた．

写真 5　ウランバートルの大渋滞．
血気盛んな運転手が多いため常にクラクションが鳴り，いたる所で小競り合いが起きる．

帰路は極めて順調であった．往路で迷いに迷ったルートはすべて GPS で記録している．それよりも，モンゴル人は，信じがたい地形記憶・ルート選択能力を発揮した．彼らは私の GPS の助けを借りなくても県都オンドルハーンまでの 240km の道のりを一度たりとも間違えることなく，わずか 4 時間の驚異的な時間で駆け抜けた．オンドルハーンでゴリヤシと呼ばれる羊肉の炒め物とライスの定食を頬張り，すぐに車に戻り 3 時間後の 20 時，日没前のウランバートルに到着した．ウランバートルは大渋滞であった（写真 5）．着飾った人々で賑わう町に戻り，3 人とも自然に笑みがこぼれた．カフェで注文した冷えたビール「ハルホリン（カラコルム）」がうまかった．

翌朝，フランスのイヴ・コパンス教授にメイルを打った．（つづく）

【投稿のお願い】

本会では，会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています．広く，歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます．

『メトロポリタン史学』（The Metropolitan Shigaku）投稿規定

(1)　本誌は，年一回 12 月に発行するものとし，原稿の締切は，毎年 8 月末日とする．

(2)　投稿資格は，原則として会員に限る．ただし，編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない．

(3)　投稿言語は，日本語または英語とする．

(4)　投稿原稿は，歴史学・考古学，歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする．

①論文（図表を含み，24,000 字以内；英文の場合は，8,000 語以内）

②研究ノート・史料紹介（同　12,000 字以内；英文の場合は 4,000 語以内）

③学界動向（8,000 字以内；英文の場合は 2,700 語以内）

④時評・提言（4,000 字以内）

(5)　論文，研究ノート（縦書き，横書きいずれも可）には，欧文で要旨（300 語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内）．また目次用の英文タイトルを付記する．

(6)　原稿は，編集委員会が採否を決定する．その際，論文，研究ノートについては，編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る．

(7)　著者校正は，初校のみとし，校正時における文章の大幅な変更は認めない．

(8)　注は，末尾にまとめる．

(9)　原稿は原則として，印字された原稿（表，図表を含む）3 部，フロッピーディスク及び別記送り状*（1 部）を提出する．

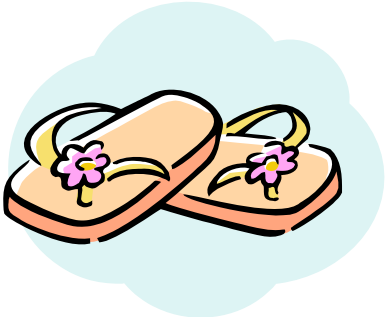
(10)　掲載の論文，研究ノート・史料紹介，学界動向については，別刷り 50 部を進呈する．

(11)　原稿の送り先，照会については，

〒192-0397 八王子市南大沢１－１　首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野），河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室）　Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp（河原温研究室内）
SNC47077@ nifty.com（河原温）

＊ 送り状は学会ホームページ（http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/）からダウンロードしたものをコピーするか，事務局にお問い合わせください．

【事務局からのお願い】

● 夏の猛暑もようやく一段落つき，朝晩はだいぶ過ごしやすくなってきました．本年は，地震の影響で大海・総会が開催できなかったこともあり，年会費請求のお知らせが遅延したままとなってしまいました．この機会に一人でも多くの方が会費を年度内にお支払い下さるよう切にお願いします．納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい．一般 5,000 円，学生・院生 3,000 円です．

メトロポリタン史学会（会長　佐々木隆爾）
〒192-0397
東京都八王子市南大沢１－１
首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内
TEL：0426-77-2110（木村誠研究室）　E-mail：mshigaku@comp.metro-u.ac.jp
ホームページ：http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/
郵便振替：00100-0-537287　メトロポリタン史学会